

# 文化の分化と権力

—M・G・スミスの複合社会論とその批判についての覚え書き—

鈴木 慎一郎

## 1 はじめに

本稿で筆者が行なおうとするのは、カリブ海地域英語圏の諸社会にかんする理論の一つであるスミスの複合社会論(plural society theory)とそれに対する批判とを整理することである。

本稿での議論はある学問的企てのなかでの準備的な作業にあたる。その企てとは、カリブ海地域についてなされてきている文化の複数性にかんする諸言説を、それらが誕生してきた特定の時代の力関係のなかに歴史化するというものである。

近年の文化論の領域においては、文化的に均質なものとして想像された共同体が脱構築され、単一性に対する複数性、純粋性に対する混濁性、などが称揚される機会が多くなっている。しかし何人もの論者がすでに指摘しているように、文化の複数性や混濁性の賛美はしばしば、いわゆる「何でもあり」のポストモダンの状況の賛美と似たような姿をとり、文化の混濁が実際に起きる際の、あるいはより今日的な言葉でいえばグローバル化の展開における、政治的経済的な不均衡を逆に隠蔽したり追認したりしてしまう。

こうした文化論の領域における傾向のなかで、筆者が研究しているカリブ海地域が、文化の複数性や混濁性にかんしての特権的な場としてとりあげられることがある。カリブ海地域は、近代世界システムのなかで中心のヨーロッパに対する周辺地域として形成されてきた一つの「カリブ海世界」(石塚編 1991)である。そこでは「土着の」先住民はほとんど残っておらず、住民は地球上の他の地域からさまざまな事情で移り住んできた者たちの子孫であり、したがってこの地域の文化が多様性にきわめて富んでいることは事実である。そして、カリブ海地域の知識人たちが自分たちの属する文化にかんして行なってきた理論や思想や表現文化も、そうした多様性を反映してきた。

カリブ海地域英語圏についてなされてきた学問的な仕事のうちで、文化の複数性や混濁性を理論化したものには、ジャマイカ生まれの人類学者スミスによる複合社会論(たとえば Smith 1965)と、バルバドス生まれの歴史学者/作家プラスウェイトによるクレオール社会論(たとえば Brathwaite 1971)などがある。しかしいずれの論も、それが誕生してきた文脈から切り離してハイブリディティ礼賛の論として読むことは、とても不可能なものである。少なくともこの二つの議論は、「根なし草的」で「国民などいない」と永らくみなされてきた(ウォルコット 1998)カリブ海地域においてナショナルなものをいかに立ち上げることができるのか、という思索から現地の知識人たちが不可避であったという事実を離れたところで読むことはできない。つまりいずれの論も、カリブ海地域英語圏における国民創生のヴィジョンにかかわっているのである。

筆者は別の稿で、プラスウェイトのクレオール社会論を同時代の社会的・政治的・思想的文脈のなかから提出されたものとして読む試みを行なった（鈴木 1998）。そこで述べておいたように、クレオール社会論は一つの意味で複合社会論に対する批判として構築されたものである。いっぽうスミスの複合社会論にかんしては、ジャマイカの社会学者D・ロボサムによる一連の鋭いイデオロギー分析（Robotham 1980, 1985）があるが、それについてはまた独自の稿が書かれるべきである。したがって本稿では、複合社会論をカリブ海地域とくにジャマイカの国民創生にかんする言説として分析する前の段階として、複合社会論における主要概念の整理と検証、それから従来それに対して寄せられてきた諸批判の論点の明確化を行ないたい。これが最初に「準備的な作業」といったことの意味である。

## 2 複合社会論の主要概念

スミスの複合社会論は、カリブ海地域の人類学・社会学において現在までもっとも影響力の大きい理論といわれ（Craig 1982: 151）、複合社会論をジャマイカの国家独立時のミドルクラスのイデオロギーが反映された理論として批判的にとらえるロボサムも、「学界内における限り、社会を特徴づける社会的・民族的な分裂をもっとも現実的なかたちで描写する理論」（Robotham 1980: 88）と評している。

スミスの複合社会論における主要概念のまず一つは、制度（institution）である。スミスによれば、特定の人々の文化の核をなしているのは、その社会の複数の制度からなる体系である。一つの制度は、行為、社会的集合、観念、価値観、規則が、社会生活においていかなる持続的形態をとるのかを定める。したがって、特定の人々によって実践されている制度は、かれらの社会構造の基盤をなす。ゆえにかれらの社会構造を研究することは、かれらの制度のシステムを分析することである（Smith 1965: 79-80; 163）。

次に、制度は基本的・義務的制度と、二次的・選択的・専門的制度との二種類に分類される。前者である基本的制度をなすのは、「親族組織、教育、宗教、財産と経済、娯楽、およびある種の団体（certain sodalities）」（Smith 1965: 82）である。

この制度という概念を用いて、いくつかの社会を比較してみたとき、次のような分類が可能であるとスミスは論じる。まず、その人口全体が、特定の複数の制度からなるセットを共有している社会は、均質社会である。次に、人口全体が基本的制度を共有しつつも、二次的の制度については異なった制度が実践されている社会は、不均質社会である。そして、一つの社会のなかにそれぞれ異なった基本的制度を実践している複数の人間集団がみつめられる場合、その社会は複合社会である。また、複合社会内でのそうした人間集団は、通常社会学では社会的クラスと呼ばれているものの、文化セクションという用語で呼ぶのが適切であるとされた。

不均質社会と複合社会との区別にかんしてスミスは次のような例を挙げている（Smith 1965: 83-84）。アメリカ合州国はスミスによれば複合社会ではなく不均質社会である。たとえば、ニューヨークにはギリシャ系、イタリア系、アイルランド系などの住民が生活しており、それぞれ独自の宗教的慣習、家族の慣習、言語、団体を持っているかもしれない。それぞれの民族集団が独自の文化セクションをなしているかどうかは、次の点にかかっている。

個々の役割、たとえば父親、母親、紛争の調停者、聖職者などの役割が、異なる民族集団の間で共通な定義を与えられているか。もしそうであったなら、これら複数の民族集団は、同一の制度体系を共有しているとみなされる。逆に、これらの役割に与えられた定義が民族集団によって異なっていたのなら、それは民族集団によって社会的集合の形態や観念の形態が異なっていることを意味する。

この観点から前述の、ニューヨークにおけるギリシャ系、イタリア系、アイルランド系の住民をみてみると、これら三つの集団においては、婚姻と家族をめぐる集団間の差異はむしろその内容においてみとめられ、婚姻と家族の形態や社会的機能や規範については、集団間で共通している。同様に宗教についても、三つの集団によるキリスト教の実践は、その組織形態、儀礼、信仰において共通している。したがって、これら三つの民族集団は同一の制度体系を共有しているとみなされ、それぞれが独自の文化セクションをなしているとはみなされない。

スミスはまた合州国南部の黒人系住民についても言及する (Smith 1965 : 84-84)。合州国南部の黒人系住民は、同地域の白人系住民とは異なった制度体系を実践している。この事例においては、そうした差異を示す黒人系住民と白人系住民が居住している地域社会は、複合社会でなく複合コミュニティとみなされる。なぜならそのような地域社会は、アメリカ合州国という、共通の政治機構としての連邦政府に統治されたより大きな政治的単位の一部であるからである。

これらのスミスの見解は、彼の複合社会論における次の二点に関係している。第一に、複合性 (pluralism) という概念は、複合社会という概念から区別される。複合性とは、ある地域の住民が複数の異なる制度体系を実践する集団、すなわち文化セクションに分化している状態のことである。ここでいう地域とは、すぐ上の事例においてはアメリカ合州国南部を指す。この複合性が社会の全体においてみとめられない限りは、その社会は複合社会とはみなされない。こちらの場合の社会とは、前述の事例ではアメリカ合州国社会のことである。したがって、ある社会内に複合性がみとめられたとしても、それだけでその社会を複合社会とすることはできない。第二に、ここまでの紹介ですでに示唆されているように、スミスのいう複合社会における「社会」とは、ある単一の政治機構によって統治された区分のことに他ならない。

スミスがその複合社会論のアイデアを得たのは、経済学者ファーニヴァルによる、第二次世界大戦前のビルマ社会やジャワ社会の研究からである。これらの社会では、ヨーロッパ人、インド人、現地人 (native) のそれぞれが「独自の宗教、文化、言語、観念、生活様式を持っている。…… [中略] ……ここは、一つの政治的単位のなかで、異なったセクションの人々が別々に生活している複合社会である」(Smith 1965 : 75におけるファーニヴァルの引用)。そしてこのスミスが、この複合社会の概念を採用することによって分析・理論化できると考えたのが、他でもない当時の (つまりスミスが複合社会論を形成しつつあった1950年代の) イギリス領カリブ海地域の諸社会であった。

スミスは、複合社会論が当時の社会学の動向において持ちうる意義を次のように解説している。当時支配的であった、パーソンズに代表される構造機能主義学派によれば、社会とは共有された規範や価値の体系である。構造機能学派にとってはまた、一つの社会の統合は、

規範や価値の体系の共有をなくしては成り立たない。これに対してスミスは、イギリス領カリブ海地域の諸社会の例を挙げ、以下のように論じる。これらの社会の住民は、文化セクションごとに異なった基本制度を有しており、価値の共有の度合いは低い。このような社会の安定や統合は、共有された規範や価値によってではなく、植民地政府あるいは特定の文化セクションによる、力を用いた威圧によって維持される。またこのような社会で起こる紛争（奴隷反乱や人種暴動など）の頻発も、規範や価値の共有がないためとされる。

### 3 複合社会としてのジャマイカ

次にスミス自身によるジャマイカ社会の分析を整理する。

まず取り扱うのは、スミスのもっとも初期の著作の一つであり、1952年から1953年にかけて執筆されたという“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820” (Smith 1965: 92-115) である。ここでスミスは、1820年頃の歴史的資料を用い、奴隷解放直前の社会構造の記述を行なっている。それによれば、社会内には主にその法的地位の違いによって区分される三つのセクションが存在し、その分化は人種と肌の色の分化とほぼ対応している。「これらの社会セクションは、厳格な上下関係のなかに組織されており、社会的・法的な地位の差異によって定義される」(Smith 1965: 112)。具体的には、このヒエラルキーの上層は、法的にはすべて自由民であるところの白人、中層は少数の黒人を含むが主に混血からなる自由民、下層は少数の混血を含むが主に黒人からなる奴隷によって、それぞれ構成される。これら三つのセクションは、それぞれ異なった文化を実践している。その内容として挙げられているのは、宗教、法的・政治的組織、教育、親族、mating のパターン、家族組織、資産にかんする権利、土地の保有と使用、労働、言語、職業、技術、コミュニティ組織、市場、価値、娯楽、伝承などである。

スミスによる実際の詳細な記述は、白人、混血（自由民および奴隷）、自由黒人、奴隷、という順序で行なわれている。混血自由民は、選挙権・被選挙権がみとめられていなかったという点で、白人とまったく同等の法的権利を享受するには至らなかったが、武器の携行、白人武官の指揮下にある軍隊への加入、法廷で自由民に対して不利な証言を行なうことなどが許されていた。またかれらは、白人の親族から財産として奴隷や土地などを継承し、教育を受けることもできた。これらの権利や特典が同様に自由黒人にもみとめられていたかどうかの記述はこの箇所にはない。自由黒人は、主人の好意によって解放されたという比較的少数の場合を除き、たいてい本人の意志にもとづいて自由の身分を買った。奴隷層の内部では、黒人奴隷が主に農場での労働に使用されたのに対し、混血奴隷は職人や家内奴隷として主に使用された。したがって黒人奴隷に比べれば混血奴隷のほうが容易に自由の身分を買うことができた。

次に、スミスが現代ジャマイカ社会を扱った論考として、1956年に執筆されたという“The Plural Framework of Jamaican Society” (Smith 1965: 162-175) がある。それによれば、現代ジャマイカ社会には三つの異なる文化セクションがみとめられ、それぞれが白人・混血・黒人という、人種およびカラーの区分に対応しているという。そして、個々の制度について白人のセクション、混血のセクション、黒人のセクションの間での差異が記述されて

いる。

すなわち、まず親族原理については三つのセクションを通じて双系が一般的であるが、白人セクションよりも混血セクションのほうが、さらに混血セクションよりも黒人セクションのほうが、より母系的な傾向を持つ。家族組織についていえば、白人セクションは双系的、混血セクションは父親中心的、黒人セクションは母親中心的である。また mating のパターンと婚姻にかんしては、白人セクションにおいては西欧的規範にもとづく婚姻が理想とされ、婚姻と mating と共住とがすべて一致する。対極である黒人セクションにおいては、婚姻と mating と共住とは必ずしも一致せず、慣習婚や visiting union<sup>(1)</sup>が広く普及しており、婚姻は一生のうちかなり後の段階になってから行なわれ、たとえば孫の誕生が婚姻に先立つことも珍しくない。宗教にかんして白人セクションは、現代の西欧社会において支配的である不可知論的 (agnostic) 態度をとり、混血セクションは教派的キリスト教、黒人セクションは精霊憑依・呪術・信仰治療などによって特徴づけられるアフリカ系宗教を实践する。教育については、白人セクションは海外の大学、混血セクションは現地の二次教育機関、黒人セクションは現地の初等教育機関が、それぞれの最終学歴となる。教育程度にかんするこの差異は、そのまま雇用関係および職業的地位の序列、さらには収入・威信の序列へと反映する。財産にかんしては、白人セクションの財産は法人組織、農園、工場など、それをもとに大企業の経営がなされる場所の資産である。混血セクションにとって財産とは、自由保有のもとにあるかあるいは抵当に入っている家屋、土地、中小企業などである。黒人セクションにとっての主な財産とは、家族地と呼ばれる、法的な所有権に特にもとづくこともなく保有・継承されている土地である。紛争の調停にかんしては、白人セクションにおいてはそれは専門家への依頼を通じて法廷で行なわれるが、黒人セクションにおいては呪術師オービア (obeah)、司祭、村の弁護士による仲介や、家族地のやりとりなどによって遂行される。これら以外にもスミスは、言語、娯楽、利用される金融機関、物質文化などの領域においても、セクション間で差異がみとめられると書いている。

以上がスミスによる、複合社会論のジャマイカ社会への適用である。

#### 4 複合社会論への諸批判

現在にいたるまでスミスの複合社会論は、その理論的枠組と事例への適用との両方に対する数多くの批判を招いてきた。なかでも代表的なものをここで要約してみたい。

まずクーパーは、スミスによって記述されたジャマイカ社会の分化のありさまは厳格すぎると批判し、“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820”において指摘されたような、法的地位の分化、文化の分化、カラーの分化の対応関係について疑問を呈している (Kuper 1976 : 56 ; 1977 : 117-120)。クーパーによれば、法的には自由人である限りにおいては混血自由人と黒人自由人とは区別されておらず、また1830年代に選挙法が改正された後は、選挙権は財産の規模に応じて与えられたのであり、人種にもとづいて与えられたのではない。さらに、19世紀には混血系住民の間から多数の植民地議会議員が誕生した。同じく19世紀には、カラーの境界を越えて婚姻や財産継承が行なわれた。以上を論拠にして、クーパーは法的地位や社会・経済的地位の分化・文化の分化・カラーの分化の

対応について異議を唱えている。

実のところクーパーのこの批判は、前節で取り扱われたスミスの二つの論考、すなわちそれぞれ1820年頃の社会を対象にしたものと現代の社会を対象としたもののどちらかいはづを標的にしたものなのか、それとも両方を標的にしたものなのか、いま一つ不明瞭なものである。なぜならクーパーは1820年以降の社会変化を論拠にして批判を行なっているからである。

筆者の読解によれば、スミスは社会内の分裂をそれほど厳格なものとして描写してはいない。スミスは、まず“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820”で、法的地位とカラーとの対応は普遍的にみられるものではないと書いている (Smith 1965: 112)。次に“The Plural Framework of Jamaican Society”では、スミスの描写はより巧妙である。すなわち、ジャマイカ社会には三つの文化セクションがみとめられるが、「当面の言及のために、われわれはこれら三つのセクションをそれぞれ白人、混血、黒人として思い浮かべるであろう。…… [中略] …… カラーによるこれらの係数は、第一には理解を容易にするものであるが、それらは各セクションにおける人種的多数派と文化の由来とを正確に示している」 (Smith 1965: 163)。

この箇所からうかがえるのは、“The Plural Framework of Jamaican Society”においては分析の一義的な対象は文化セクションの分化なのであり、ジャマイカ社会においては偶然それがカラーの分化と一致しているために当座の理解を手助けするというだけのことで、カラーが異なれば文化も異なるというのは必ずしもすべての社会にみとめられる普遍的な現象ではない、という主張である。この主張は、すでに扱ったスミスの二つの論考の時期的には中間に位置する、複合社会論の枠組を提示した理論的・抽象的な論考“Ethnic and Cultural Pluralism in the British Caribbean” (Smith 1965: 10-17)における次のような論を支持するものである。「複数の異なった人種集団は単一の文化を共有するかもしれない。…… [中略] …… また逆に、単一の人種集団を構成する人々は、[その内部で互いとは] 異なった文化を実践するかもしれない」 (Smith 1965: 15)。

すると、ここまで言及したスミスの三つの論考、すなわち執筆・初出年順に並べれば“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820” “Ethnic and Cultural Pluralism in the British Caribbean” “The Plural Framework of Jamaican Society” を通じて、スミスの論においてある変化が起きているのが指摘できる。まず“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820”においては、スミスの焦点は法的地位・カラー・文化のいずれかに特に限定されることはなく、記述の単位としてはそれら三種類の区分が混在している。その後に複合社会論の枠組が形成されると、スミスの主要な関心はあくまで文化セクションの分化へと限定され、文化セクションの分化とカラーの分化との対応は付随的な現象として片づけられている。この変化においては、一つには複合社会論をカリブ海地域のみにも適用可能な理論としてではなく、一般的社会理論として発展させようというもくろみがあったのかもしれない。

したがってクーパーからの批判についていうならば、まずそれが“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820”に向けられたものであったなら、スミス本人はそうした図式化は必ずしも厳格なものではないと書いている。またクーパーから

の批判が“The Plural Framework of Jamaican Society”に対するものであったなら、クーパーは、ここでのスミスの目的が文化の分化とカラーの分化の並置にあるのではなく文化セクションの分化の記述にある点に、注意を払っていないことになり、したがって批判は複合社会論そのものとは別のところに対してなされていることになる。

クーパーはもう一つ、文化の多様性という観点からジャマイカ社会の構造を記述するという方法ははたして正当か、という批判も行なっている (Kuper 1977: 119)。この批判は前述の批判と異なり、複合社会論そのものに向けられている。クーパーによれば、黒人セクションによって実践されているとスミスがいうアフリカ系宗教は、実際はアフリカ文化の孤立した残存にすぎないか、あるいはクレオール文化パターンへの適応を通じて変容した結果である。奴隷の間ではアフリカの慣習が残存していたのかもしれないが、それらをアフリカ文化と呼ぶことはできない。また混血中間層にかんしてクーパーは、カーティンの著作 (Curtin 1955) を引いて、かれらの態度、世界観、世論は白人層のそれにひじょうに類似していたのではないかとする。以上を論拠にしてクーパーは、少なくとも19世紀以降はジャマイカ社会には本質的な意味での文化の分裂はみとめられない、と主張した。

クーパーのこちらの批判と論点を分け合うのが、クレオール化の進行を根拠に複合社会論を批判したプラスウェイトである (ただしアフリカ系文化への評価についてプラスウェイトはクーパーと異なっているが)。前述のようにスミスは、奴隷解放直前のジャマイカは複合社会であり、そこには社会を構成する各セクションを越えて共有されているような規範や価値はなく、したがって白人セクションによる力を用いた威圧が社会としての統合を実現させている、とした。プラスウェイトは互いに関連した二つの点においてスミスを批判した (Brathwaite 1971)。まず第一に、当時のジャマイカ社会においては、他ならぬクレオール化の過程のために、異なるセクションの間で共通した価値や規範が抱かれはじめていた。そしてそれらを基盤にした社会統合の可能性が生じはじめていた。そしてそのクレオール化とは、プラスウェイト自身の用語によれば、強者が弱者を文化的に同化するアカルチュレーション (acculturation) ではなく、弱者の文化が強者のそれに浸透していくインターカルチュレーション (interculturalism) であった。第二に、黒人奴隷のセクションを支配の客体としてのみ描くのは誤りである。複合社会論では、支配的な地位にあるセクションの権力の行使によってのみ社会の統合や凝集が保たれるとされるため、他のセクションは支配される対象でしかないことになる。しかし第一の点でみたように、プラスウェイトのいうクレオール化は、文化交雑の過程における主体としての黒人奴隷の役割を強調したものであった。したがってクレオール化の歴史においては、文化創造の積極的な加担者としての黒人奴隷、という像に光が当てられるべきであるとされる。以上がプラスウェイトによる複合社会論批判である。

複合社会論に対する批判としてはさらに以下のようなものがある。マッケンジーは文化的差異というときの基準の曖昧さを指摘する (McKenzie 1966: 57)。すなわち、制度の実践における差異がどの程度であれば二つの異なる文化セクションが存在するといえるのか、スミスは明確な基準を与えていないために、ある社会が複合社会かどうかについては常に不確かさがつきまとうことになる。

複合社会としてのカリブ海地域英語圏諸社会には共有された価値は存在しない、というス

ミスの主張も、多くの批判を招いた。批判者たちによれば、西欧的な事象を優れたものあるいは望ましいものとみなす価値、すなわちヘンリーケスのいう「白さへの偏向」<sup>(2)</sup>が、社会のすべてのセクションにおいて支配的であり、これを共有された価値としてとらえるべきであるという。

これと関連してクレイグは、価値を経験的資料から分析する際の困難さを指摘している（Craig 1982: 154）。価値の分析が複合社会論において中心的な位置を占めることは、本稿のここまでの議論からも明白である。われわれはたいいてい、行動を観察することによってそれを動機づけた価値を推測するが、そうして推測された価値によってわれわれはまた当の行動を説明しようとする。

また、複合社会論は実のところ理論とは呼べないのではないか、という批判がある。制度という主要概念を用い、均質社会・不均質社会・複合社会などの類型を設けることにかんしては、それがさらなる理論の構築のためのタクソノミーであるのか、それともスミスのいう複合社会論の終結点にあることなのか、はっきりしない。前述した二つの事例研究についても、それらの内容が、ある時期のある社会内部での異なった複数のセクション間の多様性の描写以上のものであるかは疑問である。

上の指摘と関連しているのは、次のような批判である。スミス自身の解説によれば、複合社会論は、価値の共有を欠き政治機構による威圧によって統合されているような社会における分裂・葛藤などの現象の理論化を志したものである。しかしその理論の実際は、静態的・非歴史的な理論であり、葛藤の生まれるダイナミズムや、社会変化の要因どころか記述さえも入りこむ余地がないような類のものである、という批判がある。

マッケンジーによれば、葛藤の問題はスミスの場合、ある種の循環論によって説明されている。すなわち、スミスはまず葛藤の頻発を当該社会での共有された価値の不在によって説明するであろう。次にスミスは、共有された価値の不在という点からその社会を複合社会として分類し、さらに逆に、複合社会は共有された価値を欠く社会であるので葛藤は不可避である、と論じてしまうであろう（McKenzie 1966: 58）。

これと類似した循環論的説明は、スミスがそもそも反駁しようとした構造機能主義学派の一部にもみうけられるものであった。社会変化にかんして有効な考察を与えることができないという点とともに、この循環論的説明は構造機能主義学派と複合社会論の双方が抱える難点であるというのは、多くの論者が指摘するところである（たとえば Baber 1987: 85）。

さらに、ミルズはグラムシを援用しながら、社会統合の原理についてスミスが前提としている二分法に疑問を唱える。その二分法とはすなわち、力を用いた統合と共有された価値による統合という区別である。ミルズは次のように批判を展開する。階級社会においては、生産手段を保有したり経済-政治的権力を有する階級は、精神的生産物の生産手段をも手中におさめ、かれら自身の価値が反映された支配イデオロギーを発展させる。精神的生産物の生産手段を持たない階級は、支配イデオロギーへの服従を余儀なくされる。支配イデオロギーは階級社会の現状を正当化し、対抗的なイデオロギーおよび行動の発展を妨げる。支配イデオロギーは「現行の社会における不平等は倫理的に正しい」とか「現行の社会的序列は個々人の努力、知能指数、教育程度、家柄などを忠実に反映しており、社会システムの側に非はない」という具体的な内容を含んでいるかもしれない。これらを考慮した場合、ある社会に



において実現している統合が、単一のセクションの強制的な支配によるものなのか、それとも他のセクションの同意によるものなのかを問うのは、あまり意味がないことになる (Mills 1987 : 78-79, 85-86)。

## 5 複合社会論と階層化

スミスの複合社会論に対する批判のなかで、社会構造研究の脈絡において重要な批判の一つは、次のようなものである。複合社会の記述において、スミスは従来階層社会の特徴として扱われてきた社会関係についてところどころで言及しているにもかかわらず、その分析の焦点はあくまで相対主義的にとらえられた文化にあり、社会内の各セクションの序列化や物質的・経済的基盤の分析、ひいては階級の分析は二義的な位置づけしか与えられていない (Mills 1987 : 89-90)。

階層化にかんするスミス自身の重点の置き方は、事例研究かより理論的な著作かによって異なっているようである。

事例研究においては、対象社会の階層化についてはしばしば言及がなされている。たとえば“Some Aspects of Social Structure in the British Caribbean About 1820”によれば、「西インド諸島においては、[各文化セクションは] 厳格な序列関係のなかに組織され、社会的地位・法的地位の差異によって定義されている」(Smith 1965 : 112)。また“The Plural Framework of Jamaican Society”においては、社会内には収入と威信との相関にかんするスケールがあり、異なる職業集団は異なる金額の収入を得て、それに応じた威信を獲得する (Smith 1965 : 166)、と書かれている。スミスは残念ながらここでは、この「序列関係」にかんする認識がセクション間で共通した「スケール」として存在するものなのか、そしてそれが定義上複合社会には欠如しているはずの共有された価値観であるのかどうかについては議論を行っていない。

いっぽうスミスは、カリブ海地域研究のさまざまな枠組を概観した論考のなかで、社会クラスの概念の社会科学における有効性に対して懐疑を示したうえで (Smith 1965 : 50)、次のように論じる。階層化と複合性とはそれぞれ独立した現象であり、両者を同等視したり、一方を他方へと還元することはできない。ある階層に属する人々が、互いに異なった基本制度を有することはありうる。また、ある階層社会において複数の異なった階層が同一の基本制度を共有することもありうる。クラスの違いは生活様式の違いとして具体的に表れるかもしれないが、同一の文化制度を共有している限り、生活様式は同一である。したがって、ある複合社会において、それに含まれるすべての文化セクションがヒエラルキーのなかに序列化されるという必然性はない (Smith 1965 : 82-83)。さらにスミスによれば、複合社会においては、個々の文化セクションが社会的地位にかんするそれぞれ独自の基準を有しており、一つの社会内においてそうした複数の価値体系が存在することによって、単一の価値体系による社会全体の階層化や序列化が妨げられている (Smith 1965 : 82-83)。この点の記述はしかし、ジャマイカ社会内の各文化セクションはある序列のなかに組織され、個人はその収入に相応の地位を与えられるという、事例研究におけるスミス自身の観察と矛盾するものである。

## 6 むすびにかえて

以上本稿では、スミスの複合社会論にかんして、その主要概念と諸批判について整理を行なってきた。

全体として複合社会論は、カリブ海地域の社会の理解を目的としているのか、それともその他の地域にも適用できるような説明力の高い理論を目的にしているのか、という観点から読んだ場合、どうもはっきりしない。ある複合社会を構成するすべての文化セクションが上下関係のなかにランク付けされる必然性はないという主張や、カラーが異なれば文化も異なるというのはすべての社会にみとめられる普遍的現象ではないという主張は、カリブ海地域の社会を理解するうえでは奇妙なほどに自己拘束的なものに思える。それらの主張は複合社会論の一般的社会理論としての洗練をめざしたがゆえのものかもしれないが、事例研究としてたとえばジャマイカ社会を扱う限りにおいては逆に障害となりかねない。住民の意識においては、文化的差異、階層、カラーという三つの問題は、同一の社会的現実を構成する互いに不可分の要素となっているからである（たとえば Austin 1984を参照）。

実はロボサムによる複合社会論のイデオロギー批判も、いま述べた奇妙なほどの自己拘束的な点にかかわっている。要するにロボサムによれば、スミスの複合社会論は、まず何よりもセクション間の文化的差異を表象しようとするものであって、同時にそれは、文化的差異は人種区分とは本質的な連関を持たないと付け加えることにより、文化的差異（それは水平的に概念化される）が政治・経済的序列（それは垂直的に概念化される）へと読み替えられるのを先回りして防いでしまうような議論であるという。一つにはこの意味でロボサムは複合社会論をジャマイカ独立時のミドルクラスのイデオロギーの反映として批判したのであるが、しかしこれは稿を改めて論じたいトピックである。

## 註

- (1) 一人の男性と一人の女性とが、一つの世帯として恒常的に共住することなく、一方が他方の家を訪ねる形で持続的な関係を維持すること。
- (2) ヘンリーケスによれば、より白人的な容貌、たとえば明るい肌の色、直毛、「まっすぐな」（筋の通った）鼻などが望ましいとみなされ、逆により黒人的な容貌、すなわち濃い肌の色、縮れた毛髪、「平らな」鼻などが望ましくないといふ「白さへの偏向」が、上層・中層・下層というすべての階層に受容されているという。この価値観に裏打ちされた行為としてヘンリーケスが例示するのは、男性の間にみられる、結婚や恋愛の相手として肌の色の明るい女性を選好する傾向、そして女性の間に普及している、直毛や明るい肌への加工の技術である（Henriques 1951；1968：55-59）。ヘンリーケスによるこれらの観察は1940年代のジャマイカ社会にかんするものであるが、いっぽうミラーは、1960年代末時点のジャマイカ社会における身体にかんする美的価値観を、キングストン地区のセカンダリー・スクールの学生 475名を対象にした質問表調査から明らかにしようとした（Miller 1969）。被調査者は、「自分の身体のうちでどの部位が気に入っている（もしくは気に入ってない）か」や「もし可能であったなら自分の身体のどの部位を改変したいか」などの質問への回答、および、「ハンサムな少年」や「可愛い少女」や「平均的ジャ

マイカ人」がどのような身体的特徴を持っているかの形容を求められた。被調査者はまた、ミラーによって訓練された判定者たちによって、white, fair, clear, brown, dark, black, Chinese のいずれかに分類された（被調査者に Indian と分類される個人はいなかった）。回答の分析と考察を通し、ミラーは次のような結論を導いた。まず身体にかんしては、ある特定の美的価値観が、分類されたすべてのカラー・グループに共通してみられた。そしてその美的価値観によれば、個人の身体部位は、肌の色を除き、コーカソイドのその特徴に近づくほど好ましいものとして評価され、逆にニグロイドのその特徴に近づくほど否定的に評価された。肌の色にかんして、すべてのカラー・グループにもっとも好ましい色として挙げられたのは、white ではなく、連続体の上では白の極からやや黒側に近づいた fair や clear であった。ミラーは、このもっとも好ましいとされる肌の色が white ではないという結果は、社会のなかで進行した変化の反映として説明できるのではないかと考えた。

### 参考文献

- Austin, Diane J. 1984 *Urban Life in Kingston, Jamaica: The Culture and Class Ideology of Two Neighborhoods*. N.Y.: Gordon and Breach.
- Baber, Willie L. 1987 "The Pluralism Controversy: Wider Theoretical Considerations." *Caribbean Quarterly* 33 (1 & 2): 81-94. Kingston: U.W.I.
- Brathwaite, Edward 1971 *The Development of Creole Society in Jamaica, 1770-1820*. Oxford: Clarendon Press.
- Craig, Susan 1982 "Sociological Theorizing in the English-speaking Caribbean: A Review." In *Contemporary Caribbean: A Sociological Reader, Volume Two*, edited by Susan Craig, pp. 143-180. Maracas: College Press.
- Curtin, Philip D. 1955 *Two Jamaicas: The Role of Ideas in a Tropical Colony, 1830-1865*. Connecticut: Greenwood Press.
- Henriques, Fernando 1951 "Colour Values in Jamaican Society." *British Journal of Sociology* 2 (2).
- Henriques, Fernando 1968[1953] *Family and Colour in Jamaica*. Kingston: Sangster.
- 石塚道子編 1991 『カリブ海世界』 世界思想社
- Kuper, Adam 1976 *Changing Jamaica*. Kingston: Kingston Publishers.
- Kuper, Adam 1977 "Race, Class and Culture in Jamaica." In *Race and Class in Post-colonial Society*, edited by UNESCO, pp.111-149. Paris: UNESCO.
- McKenzie, H. I. 1966 "The Plural Society Debate, Some Comments on a Recent Contribution." *Social and Economic Studies* 15(1): 53-60. Kingston: I.S.E.R.
- Miller, Errol 1969 "Body Image, Physical Beauty and Colour Among Jamaican Adolescents." *Social and Economic Studies* 18(1): 72-89. Kingston: I.S.E.R.
- Mills, Charles 1987 "Race and Class: Conflicting or Reconcilable Paradigms?" *Social and Economic Studies* 36(2): 69-108. Kingston: I.S.E.R.
- Robotham, Don 1980 "Pluralism as an Ideology." *Social and Economic Studies* 29(1): 69-89. Kingston: I.S.E.R.
- Robotham, Don 1985 "The Why of the Cockatoo." *Social and Economic Studies* 34(2): 111-151. Kingston: I.S.E.R.
- Smith, M.G. 1965 *The Plural Society in the British West Indies*. Berkeley: University of

California Press.

- 鈴木慎一郎 1998 「複数文化をめぐる言説の歴史化にむけて——ブラスウェイトのクレオール社会論に関する試論」『〈複数文化〉のために』複数文化研究会編 人文書院
- ウォルコット, デレック 1998 「アンティル, 叙事詩の記憶の断片としての島々——1992年ノーベル賞受賞記念講演」 植田章子訳 『みすず』443号 72～88ページ